

レーザーコンパス

ブラウジング

清水 忠雄*

Tadao SHIMIZU*

近頃、物理学や応用物理学の分野でも、かなり限られた専門分野の学術誌が多く刊行されている。物理学・応用物理学全般にわたる伝統ある学術誌も、たとえばPhysical ReviewやEurophysicsなどのように、専門分野毎に分冊されていることが多い。最近のように情報の量が極端に多く、一方で専門の分化が進み、周辺分野の論文がなかなか理解し難くなってきた状況では、学術誌はなるべく専門化した方が、出版する側からも受けとる側からも、むだが少なく効率的であることはいうまでもない。

必要な論文のコピーをとっている際、たまたまその号に面白そうな論文がのっていて、つい一緒にコピーをとってしまったというような経験も多い。ある本を求めて書棚を眺めているうちに、つい面白そうな本をみつめて、思わず読みふけてしまうこともある。このような行動を図書館用語では、ブラウジング(browsing)とよんでいる。これは、目的をもった行為には一時的には妨げとなるが、人間形成の上では重要な効果で、したがって図書館のも一つの重要な機能であると考えられている。

ブラウジングの概念をやや拡張して考えてみると、このような効果は、いろいろな所で起こっていると期待される。一篇の論文を読む場合でも、思いがけないところで、はっとするような表現や、なるほどと思わせられる考え方にゆき当ることがある。学部課程で、なかば強制的に学ばされた科目の中に意外な面白さがあり、それが後に心の糧になっているばかりか専門のち

がう仕事の上でも役に立っていることもある。

ところがいそがしいときには、論文のAbstractをよみ、Conclusionをよみ、必要なデータを図や表でさがして済ましてしまうこともある。これから先、学術情報がデータベース化されると、自分の机の上の端末機から必要なデータだけを引き出すというような傾向が強まってくるであろう。大学入試の科目も、一昔前からみるとかなり少なくなってきた。大学のカリキュラムでもなるべく早い時期から専門教育をスタートさせようとする傾向がある。早く最先端の研究に参加するには、ゆっくり学んでいては間に合わないということであろう。また日本の教育界や社会が長い間、どちらかというスペシャリストよりジェネラリストを作ることに専念し、あるいはそれを期待してきたということへの反省ないしは反動もあるといえないこともない。だからといってスペシャリストを作るためにはブラウジングの効果を排除しなければならないということではないように思えるのだが。

いずれにしても、現代のいそがしい社会では、ブラウジングが起るチャンスがますます少なくなっていくように思われる。“図書館”(あるいはそれに相当する所)へ、足(あるいはそれに相当するもの)を運ばなければ、決してブラウジングは起こらない。そのような状況が長く続いた場合、どんな科学者、あるいは人間ができてくるのだろうか。また科学はどんな方向に進んでいくのだろうか。

*東京大学理学部 (〒113 東京都文京区本郷7-3-1)

*Faculty of Science, University of Tokyo (7-3-1, Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo 113)